

歌の本質と表現

和歌文学講座 Ⅰ

和歌文学講座 第1巻 和歌の本質と表現

昭和四十四年十二月十日 初版印刷
昭和四十四年十二月十五日 初版発行

定価 一二〇〇円

編者 和歌文学会

会長 久松潜一

発行者 及川 篤二

印刷所 暁印刷株式会社

東京都千代田区猿樂町二ノ二ノ六

桜 楓 社

TEL(三九) 五六六〇―二
振替東京 一八〇二〇

和歌の本質と表現
目次

和歌の本質

和歌とは何か……………	長谷川 如是閑……………	九
和歌の本質について……………	高木市之助……………	三七
和歌と美的理念……………	岡崎義恵……………	四三
一 和歌の意味……………		四三
二 美的理念とは何か……………		四四
三 和歌の本質に関する古代思想……………		四六
四 感情表現説の伝統的意義……………		五〇
五 心詞論の美学的意義（一）——観照の参与——……………		五三
六 心詞論の美学的意義（二）——言語音の美——……………		五五
七 心詞論の美学的意義（三）——感動の美の本質——……………		五七
八 風雅と風流……………		六〇
九 歌体と美的様態……………		六三
一〇 美的理念としての幽玄と歌体の範疇化……………		六五

和歌の表現

和歌の発生……………	白田甚五郎……………	七
一 はしがき……………		七
二 歌の原型と祖型……………		三
三 片歌とその周辺……………		六
四 片歌から旋頭歌・短歌・長歌へ……………		六
和歌の形式……………	瀬古 確……………	一〇七
一 はじめに……………		一〇七
二 長歌の形式……………		一〇八
三 長歌の構成……………		一一三
四 対句の用法……………		一二四
五 旋頭歌の特質……………		一二六
六 短歌の形式……………		一二九
七 連作の妙味……………		一三四
八 結び——仏足石歌体等に関連して……………		一三〇

和歌の韻律	山崎孝子	一五
-------	------	----

一 序		一五
-----	--	----

二 定型詩としての短歌		一五
-------------	--	----

三 正岡子規と與謝野晶子		一六
--------------	--	----

四 古典短歌		一六
--------	--	----

五 結び		一五
------	--	----

和歌の声調	窪田章一郎	一五
-------	-------	----

一 まえがき		一五
--------	--	----

二 声調の存在のしかた		一六
-------------	--	----

三 声調の発生と発想の場		一六
--------------	--	----

四 声調と作者の主体		一七
------------	--	----

五 声調の本質		一五
---------	--	----

和歌の修辭 I	林 勉	一七
---------	-----	----

一 はじめに——推敲		一七
------------	--	----

二 和歌の修辭		一七
---------	--	----

三 枕詞——付序詞		一八
-----------	--	----

和歌の修辭 II	丸山嘉信	二〇
----------	------	----

一 和歌の修辭にはどんなものがあるか.....	二〇五
二 第一類の修辭群.....	二〇八
和歌の用語.....	滝沢貞夫.....二二五
一 伝統と創造の二律背反.....	二二五
二 歌語の位相的特色.....	二四〇
三 歌語の時代による消長.....	二四七
四 主要歌人の用語.....	二五三
五 結語.....	二六三
和歌の文法.....	佐伯梅友.....二六五

和歌の本質

和歌とは何か

長谷川 如是閑

きき手 片桐 顯智

片桐 日本のと歌について伺いたいのですが、外国の詩歌と日本の歌とはどういふ点が違っているのでしょうか。

長谷川 西洋では、詩などというものは、ギリシヤ時代から特に「詩人」と呼ばれるものがあるが、詩はそういう人間がつくったものだ。ギリシヤ、ローマ時代から、しろうとはあまり詩をつくりはしなかった。詩はみないわゆる詩人がつくったのです。ところが日本はそれと反対で、『万葉集』時代には、歌をつくるいわゆる「うたびと」などというものはいなかった。「万葉」の歌のよみ手というのはみなしろうとだった。それで千年も前に、あれだけの分量の本ができたのだった。いまの「うたよみ」といわれているようなものはいなかった。だから「万葉」時代が去ってしまうと「古今」時代からあとはみな専門詩人の歌でしょう。江戸時代に至ると、和歌は、だんだんとよむ人が上のほうへいってしまつて、江戸時代は京都の公家さんたちが「うたよみ」だった。民間ではそれに対して、いろいろの俗謡がたくさんできて、江戸時代の歌謡は、そういう会話式のものがあった。それで昔の鎌倉時代からずうっとお公家さんばかりの歌、そんなものばかりでなしに、みんな、一般人がよむ。だから日本の中世というものは、西洋の中世と違つて、民間のたくさん詩人がいて、各地のお百姓までがみな歌をよんだ。そのような国民は世界に日本の

『万葉集』に入っているなどということをついたのだ。ほくは津田君にもそんなことはないといったことがあった。あれはみな、万人の歌です。そういう意味で、日本では国民全体が詩人なのだ。シナには、漢字の読めるシナ人が少ないのだからね。日本では、ひらがなというものが千年余り前にできたでしょう。ああいうのを、フォネチックランゲージとイギリス人はいつている。そのフォネチックランゲージを文字にしたのが、いわゆる平ガナだが、万葉時代には、まだカナがなかったから、漢字をカナ文字に使ったのだった。

それでいまのカナができたのは、だからその意味で、ああいうフォネチックランゲージをもっているのは日本だけです。あとはみんなギリシャ、ローマのものを受け継いで、それだからいろいろな各国の特色によって、つづり方も違うしめんどろです。日本のひらがなみたいな、だれにでも読めるようなものは世界的にないでしょう。

だから発音のむずかしさなどというのは日本にはないけれども、昔の日本人は、相当発音がやかましかった。だからア、イ、ウ、エ、オ、でも、五十音といっているあの中に、たとえば「エ」というのは、「エ」と「エ」と二つあるでしょう。あれは昔は発音が違っていたに違いない。いまの日本人には「エ」と「エ」がうまく発音できないでしょう。だけれども昔の日本人は、発音は非常に厳格だった。そして同時に万葉式な歌をよむ能力が万人にあったのです。津田左右吉先生は、村の漁夫などがよんだ歌などというものは、みなお公家さんの代作だといったのだけれども、そんなことはない。

そのような日本人の言語の芸術——芸術といっても、文学といってもいいが——そういう日常の言語を科学的に、芸術的につくり上げる能力を千年あまり以前にもち得たのは世界に日本人だけでしょう。日本の言語芸術は中世にはもう大いに発達していたいろいろな言語の芸術があった。民謡みたいなものがたくさんできていたが、それはすでに中世の日本の言語の特色となっていた。つまりフォネチックランゲージというものが、日本では既に中世の初期から

高度に発達していたのはどういうわけかということ、専門家が研究しなければならんです。私はしろうとだ。ただ、あったということはいえるだけで、どういうわけかということ、専門家の研究にまたなければならぬ。しかし大和民族というものは、非常に同族的な、みんな親類づき合いの外国からきた種類が多い。それがみな大和民族化する過程が非常に嚴重だった。だから、大和民族というものは、世界の民族に類のない、一つの言語もそうだが、音声も発音もそうだし、そういうすべて文化的なもののすべてが大和民族でまともっている。大和民族といっても、各国から集まった民族で、純粹な大和民族などというのはないのだということ、明治の学者はそういつていた。ないけれども外国からきたのは同化するのです。外国異民族が未来は大和民族になってしまうのだ。そういう同化力が非常に日本で強いのは言語の発達だ。いろいろな文学の発達、とにかく千年も前の詩で、『万葉集』みたいな大きな本ができている国などというのは、日本のほかにない。そういう点で、日本人は言語においては世界一を誇る国なのです。だから、たとえば長歌でも、短歌でも、みなしろうとのことばなのだ。詩人という専門家のことばではないのだ。そういう点がちよっと明治の学者から今日の学者に至るまで、まだ研究が足りないのです。どういうわけで日本人がそんな音声、文学をもつことができたかという研究はあまりされていない。なぜ研究をされていないかというところ、日本の学者というものは、みな西洋の学問をまねているのだ。ことごとく。だから、そういう日本の言語の発生みたいなのを、ヨーロッパではそんな言語がないから研究者はいないのだ。ところが日本の言語学者などというものはそこまではない、みな向こうのまねをしている。だから西洋言語学の本をみてもそんなことはわからんから、日本の言語学者というものは、西洋の学者のまねをしているのだから、そのようになってしまふ。

それでは純日本の学問というか、そういう学問的な能力が、どういう方面だということを聞かれたことがあった。それで私は、そのような具体的な文明は、抽象的な頭脳の文明ではなくして、手を使ってものをつくるとか、からだ

ものをやるとか、手足の文明、つまり五体の文明だ、それが日本では非常に強調せられた。これはまたほとんど西洋ではないのです。西洋にないものは日本人というものは研究しないのだ、だからそういうことを研究している学者などないのです。私どもは専門のそういう何はないからできないけれども、もう少し日本専門の学問を発達させたらどうかということをぼくは昔もいったことがあった。

それで、たとえばいまから千年も前に『源氏物語』のようなああいう近代文学をもっている国というものは日本のほかにないのだ。言文一致などということを明治の人はいい出したけれども、あれは外国のまねで『源氏物語』もそれは要するに言文一致なのです。あの時代の文学はすべて言語と一致しているのだ。だから西洋の近代文明というものは、日本では千年も、二千年も前からもっていたのだ。『日本書紀』はシナのまねだけれども、『古事記』の文章などというものは、だからいまの言文一致と同じことです。つまり近代文明が日本では古代からあった。日本の専門学者には、そういう点の研究が足りない。だから私は、あなた方西洋の学問のまねばかりしているから、日本に純粹の学問があるべきはずのものがあなた方はつかまえないのだといって笑ったことがあった。

ただ、その間にいまの工学、商学、そういうものが日本では独特の発達をした。日本の明治時代の学問で、では、あなたのような外国のものばかりやっていないで何かそういうものがあるかといわれた。私はあるといった。それは学問ではないけれども、たとえば徒弟教育というものは日本の特色で、五体をもってあれは教えているのだ、からの動き方から口のきき方から、それでそういうのが日本のほんとうの教育で、日本ばかりでなく、世界の教育としてもそれはほんとうなのだけれども、西洋にないから、日本人はそういう教育の研究をして、教育学などというところのまねばかりでしょう。日本の教育ではからだ全体で、五体をもって教育をする。だから手の振り方から、足の運び方まで日本の教育にはあるのだ。日本では、「何だ、そんな歩き方をして」などと、よく子供たちはいわれたものだ。

つまり五体をもつてする教育が日本の教育の本体だった。そういうことを少し日本の学者も研究してもらわなくてはいけないということを、よく私はいったのだが、そうしたことを研究する専門学者は出ないのだ。だから私はよくいうのだ、あなた、西洋の洋食、あれを食べているけれども、あの洋食の日本的な洋食というものを知らないだろう。日本的な肉食というものは知らない。日本の学者と同じことで、一般人もそうなのだ。ところが日本人の肉食というのは、明治の前はお魚の肉ばかりなのだ。魚の肉を日本人のようにして食べる国はほかの国にないのです。そのように日本の文明というものは、みな日本人独特な、つまり頭の文明でなくして、五体をもつてする文明だから、お魚などは漁師から料理番までがみな独特なものをつくっているでしょう。洋食のまねをしたものなどありはしない、たとえばさしみなどというものは日本のほかにどこの国でもないのです。

いまもいろいろな特色のある日本料理があるでしょう。一切外国をまねないで、洋食風が一つもない、そのように日本人は独自の文明をもつ能力があるのだ。それを明治以来の日本人は独自の能力を養う道を知らないで、それで西洋風な教育学で、向こうの教育のとおり、でき上がったものを学んでいるだけで、それは日本人の一つの欠点であっていまの日本人が、明治以来、洋学を盛んに起こして、そして向こうのまねばかりをしていた。文明開化ということではまねなのだが、明治以前の学者みたいに、すべてが日本的なものの発達からきた文明を求めなければいけないのだということをよくいったのです。

たとえば庭園というものは世界共通なのだ。ヨーロッパでもほとんど各国の、いまイタリーの庭とか、フランスの庭とかというけれども、みな幾何学的な、図案式な庭園です。日本のような自然の形態をまねた、自然な景色をまねた庭園だとか、公園というものは世界にない、日本にしかない、シナにもない。それだからたとえば日本の庭園の特色も研究すると、なかなかこれはおもしろいものがある。庭園に関する書物はだいぶあるけれども、でも西洋より研究